

いのでありますから（これは教傳の方に屬します）廣義の方面即ち、社會一般の人々に對して解り易く且つ有益な方面につき申し述ぶることゝ致します。

心教に於ては和合暗示を以て最高最善のものとして居るのであります。從來學者間に於て、自動暗示、他動暗示なる二箇の問題は屢々論議せられ來つたのでありますが、未だ此の和合暗示と云ふ事を主張せられた處の學者はないのであります。自動暗示なるか他動暗示なるかについては私をして是を論せしめたならば、それは自動暗示でも無ければ他動暗示でもないのである。

小野道風が、柳に蛙の飛び上るのを見て、一大奮發心を起し、遂に大能書になつたと云ふやうな事は、是は自動暗示でもなければ他動暗示でもない、自動暗示と他動暗示が一體になつた處の和合暗示であります。自己の熱誠なる認識性と外界の感受性が相一致して、中道圓滿絶對和合の眞理に到達せる自覺性に依るものでありまして、實に人間の最大幸福、最大寶玉は此の和合暗示なのであります。

（八月二十七日）

### 第八章 心身相關説

「精神に快感不感不快の生起する時は、生理上に於て身體各部の神經系統を通じ、内外の諸機關に影響を與ふるものなり。即ち快感の生ずる時は、身體の各部に近き血管分泌管等廣弛の傾向を有し、従つて隨意筋、不隨意筋就中呼吸機關に屬する筋肉は一層強健となりて活動し、腸の内部活動及び心臓の鼓動亦一層強大となるものなり。而して不快感の生ずる時は全く之に反對なるが如し。」

今日御話致さんと欲する處の、心身相關説も、矢張り廣義の暗示術の方面に屬する議論であつて、我々の心理状態が如何やうに吾人の肉體に影響を及ぼすものであるかとの疑問に向つて、其の解決を與ふると同時に心身の兩面に向つて完全なる解決方法を教ゆる所の説であります。換言すれば、精神と肉體との關係論であります。

凡そ人間にとつて何が一番大切であるかと云ひましたならば、心身を健全にする位大切



なことはないのであります。心身が不健全であつたならば何事も出来ないのですから、そんな人が幾百万人あつた所で殆んど物の役には立ちませんが、たつた四十七人であつても心身共に健全であつたならば、彼の赤穂の浪士の如く萬世不朽の大業を遂行し、千載不磨の義名を後世に遺すではありませんか。

然るに世の多くの學者は天地の根本眞理を極めずして、種々なる議論を吐露致しますが爲めに全く徒勞に屬して居るものが尠くない様に思ひます。何れの學派に於きましても部分的専門の學說に至つては、専門家丈けあつて實に進歩した學說を見ますけれども、心身關聯の學說に就いて稍首尾徹底せる論說を吐いて居るものは極めて少數でありまして、今迄の多くの心理學者の理論が肉體的生理上には殆んど没交渉であつたやうな觀があるのは實になげかはいしい次第ではありませんか。又、生理學者も其の通りであつて、人間の心臓と云ふものはどんなものであるか、肺と云ふものは斯く々々のものであるか、頭の腦味噌と云ふものはこんなものであるか、と云ふやうな部分的の事は中々詳細に研究して居て、慥に學理の進歩は認めますけれども、生きて居る人間の生理状態は、どのやうに心

理状態と關係を持つて、如何に活動實用されて居るものであるかと云ふ問題に對しては、極めて因縁の遠い方になつて居るのであります。それでは幾ら生理學が進歩しても結局吾人の現在身體にとつて其の収むる處の實益は極めて微弱なものでありまして、吾人の身體は實に心理と生理との綜合不二一體、即ち生理なくして心理なく、心理なくして生理がないのであります。

實に肉體と精神とは密接不離不可分性にして、一人格を形成して居るのでありますから心即ち身、身即ち心であり、精神と肉體とは一にして二、二にして一のものであつて、此の心物不二一體の根本原理が発見せられざるに於ては、心理學も、生理學も唯部分的理論に流れて、吾人に何等の實益を與ふる事の出來ざるものであります。

又、從來の生理學者の意見に従ひますと、牛肉と云ふものが人間の身體にとつてどれだけの滋養分を持つて居るものであるか等は、中々精細に研究されて居るのであります。が、残念な事には此の滋養分は、如何なる作用に依つて其の効果を収むるものであるか、如何にして食すれば十分の効果を奏するものであるか、との根本問題が餘り研究されて居ない



やうに思はるゝのであります。

是は或る軍人から聞いた話でありますが、坊さんの新兵があつて、軍隊へ入つて来たが、どうしても肉が食べられない、無理に食べさせると云ふと顔を青くして、もごして仕舞ふ、それから命令で以て食はした處が、軍人は上官の命令ならば仕方がないから食はなければならぬと觀念して、遂に食べるやうになつたと云ふ事であります。是は本人の心理状態に立ち入つてよく／＼研究してみますと、頗る味はひのある話でありまして、生理學上の道理から申せば、牛肉は大いに人間の滋養物であるべき筈のものであるのに、人に依つては滋養分處ではない反つて害になるが爲に顔を青くしてもごすのであります。して見ると滋養分が或るものゝ爲めに單に其の滋養分を打消されて居るばかりではなく、尙一步進んで害になつて居るのである、滋養分が五ある所に五の不滋養分では、毒にもならなければ藥にもならない譯であつて、何等外容に現象を起すべき理由がないのであります。六、或は七の不滋養分を何れかに呼起して來る處があるから、滋養分を食しながら而も病となる迄の結果を見るに至る譯であります。是は抑々何であるかと申しますと、心理が根本に

なつて居るのであります。長い間の坊主生活即ち蔬菜生活が、肉類は食うべきものではないと其の人に暗示されて居つたからであります。然るに今上官の命令を以て絶対に食はざるべからずと暗示せられたので食へるやうになつたのであります。故に生理學上から論議すると殆んど滋養分にならないやうな蔬菜であつても、其の精神中に大いに之を好愛して食する時には必ず滋養分になるに違ひないのであります。或は毒も變じて藥となり、普通の生水が頭痛を止め或は眼病をなほさないことも限らないのであつて、此の間の消息を十分に了解して、心理と生理とを兩立せしめて研究しなければ、到底精神上に於ても肉體上に於ても、健全なる生きた學説を見出す事が出来ない事を信するのであります。

佛國の大醫リポール氏は「心理状態を知らざるものは眞の醫者に非ず」と云ひ、また天竺の耆婆醫王は「天下のあらゆるものは是藥なり」と云つて居ますが實に至言ではありませんか。前に述べました如く、常に滋養分ばかりをこつたからとて、決して眞に生理の眞理になつて居るものではないのでありまして、藥石と雖も決して萬能ではない、種々様々の暗示關係に於て合理のものを得なければならぬのであります。



實に天下のあらゆるものは是藥である、天下のあらゆるものは是大醫である云ふ處の根本原理を極めなければなりません。故に須らく藥も用ゆべきであります。また藥を用ひず他の暗示法に依つてなほさるゝものは宜しく暗示法に依つてなほすべきであります。藥を與へなくてもよいものに藥を與へると云ふ事は有害であり、また一つの藥劑を與へるにしても、如何にして與へるかその與へ方を考へる事は極めて大切な問題であります。牛肉が悪いと觀念して居る人に向つて牛肉を與ふるときは、先づ第一に其の人の觀念を改むる必要があります。即ち牛肉の滋養分の功能より説いて、その人の觀念をして食することを好む様に導き、而して後に與ふるときは始めて牛肉の滋養分(藥劑)が、其の目的を達する様になるのであります。

我々は食時の時に不潔のものを見るとか、或はまた悪い臭を嗅ぐとかすると、直ちに神經が聯合作用を起して來て、其の食事をとる事が厭になる事がある、或はまた『火事だ』と云ふ聲を聞いたばかりで神經が昂奮して、腰をぬかしたと云ふやうな事がありますが、これ等は何れも精神作用が直接に肉體に影響した確證であります。

たしか明治四十年頃の事だと記憶して居りますが、私の郷里に夫が日露戰役に戰死して獨りで暮らして居つた未亡人がありました。此の未亡人が或る時宮川と云ふ村へ行つた所が、矢張り同じ村のもので其の宮川村へ桃を賣りに來た男がありました。日も暮れて來たので其の男と話しながら一所に歸つて來ました處が、其の男の妻女が夫の歸るのを待ち兼ねて村端まで迎ひに來て居つた、そして二人が話しながら歸つて來たのを見たので、それが嫉妬の種となり、其の妻女は藁を以て人形をこしらへ其の喉下へ釘を打つて祈つたが爲めに、遂に其の未亡人は喉をやむやうになりましたが、是は實に心理上から生理上に偉大なる影響を與へた結果でありまして、之も私は日ならずして治してあげました。

また或る所の醫者の奥様で病氣の爲めに迷信を起し、日蓮宗の祈禱者の命令通り自分の家にあつた諸々の神様を悉く寺へ納めて仕舞つた。後に親の方から『御前は幼少の時から金神様の神恩を受けて居るのであるから、金神様を大切にしないで不可ない』と云つて參りましたが爲めに奥様は非常に精神を感亂せしめ、日蓮様についてよいやら、金神様についてよいやらと煩悶に煩悶を重ねて、遂に發狂するに至つたのであります。さうして



『私には狐や兎がついたのではない、神様がついて居るのであるから中々落つるものではない』と云つて大威張りに威張り散らすやうになりました。是も矢張り精神上から肉體に及ぼした病氣であつて、私が参りまして數日の施術でなほつて仕舞ひましたが、一時は中々な氣焰でありました。

此の大正文明の御世に於て、萬物の靈長たる人間が、狐につかれたとか、兎につかれたとか、幽霊につかれたとか云ふやうな事のあると云ふのは何たる情けない事でありませう。私は重ねて申します。我々は萬物の靈長である。狐がついたり兎がついたり、幽霊がついたりするやうなそんなつまらないものでは決してくはないのであります。一切の迷信を打破して、常住不變の眞理に一體なる處の人格を形成する事の出来る人類であります。然るに是等の點を十分に研究して、人間の本性を發揮する事に努力して居る教育家の少いと云ふ事は、實に社會國家の爲め痛嘆に堪へざる次第であります。

現今我が國に於て、神道、佛敎、基督教等専門に宗教の方面にたづさはつて居る處の宗教家なるものが、十五萬人の多數に上つて居ると云ふ事でありましたが、是等の宗教家は全體何をして居るのでありませうか。人間精神上の大問題に就ても人道の眞髓等に就ても餘りに説かぬのみならず、その本務たる感化救濟の實を擧げて居るものも至つて少數のやうに見受けらるゝではありませんか。

私は十有餘年間心身相關の道理を研究して、實際に心敎暗示術を行つて感化救濟の實驗をやつて参りましたが、越後の或る村の人で壁者を起した例もあります。また明治三十九年に中風の大患が僅か一週間で手拭をしぼるやうになり、二週間で全治した例もあります。また癲病患者の人で、甚だしく悲觀して居つた人を施術し遂に全治するに至つたものもあります。また或る金満家の息子でありましたが如何したものか野菜を食ふべ事が出来なかつた、それに施術して大いに野菜を好むやうにした例もあります。それからまた、是も或る金持の息子でありますが、盜癖があつてどうしても癒らない。或は學校長の處へ矯正の爲めに依頼して置いたり、或はまた村長の處又は警察署長の處等と色々な所へやつて見たけれども、何處へやつても惡癖は依然として少しも癒らない、遂に親共も愛憎を盡かし、こんな者を生かし置いては家名に瘻がつくばかりだから、寧ろ殺して仕舞ふと云ふ



事に相談が一決し、或る時の如きは花火を見せると誘ひ出して高い屋根の上へ登らせ、突き落して殺さうとまで企てた事もあつたけれども、流石に其の場に立ち至りますと親子の情が先に立つて殺すに殺されず、種々様々に苦心の結果遂に私の處を聞き込み、其の子供を連れて來られたのであります。そこで私は能く／＼其の子の心理状態を研究して、施術の傍ら薰陶しました處が、流石の矯正に／＼其の盜癖も遂に癒つた許りでなく、而も學校に於て優等の成績を示すやうになつたのであります。よくある事ではありますが、數學が嫌ひであるとか、英語が厭であるとか、倫理の講義を聞く頭が痛くなるとか云ふやうな事は、之は全く病的精神の作用でありまして、是等の病的は心教暗示術に依る時は一轉して、今迄の不成績が好成绩を表すやうになり、試験の場合又は嚴肅な式場等に臨む時杯に於て精神を落ちつかせる事が出来るやうになつて、實に優良な結果を見るに至る事が出来るのであります。また習字や圖畫などに於ても悪筆が一變して達筆になつたやうな例も決して少くないのであります。

以上述べました如く精神と肉體とは不二一體で誠に不可分性のものでありますから、我々が幸福な生涯を送らんとするには心身相關の眞理を極むると云ふ事が何よりの先決問題であらうと思ふのであります。

### 第九章 靈德發展主義

#### 利己主義 (自愛)

#### 利己利他不二一體

#### 利他主義 (他愛)

靈德發展主義とは、利己主義に非ず利他主義に非ず、利己利他不二一體主義であります。

### 一、利己主義

利己主義とは、何と云つても自分が一番大切なものである、すべてのものは自己本位なものである。道徳でも宗教でも倫理でも、すべて其の根本本體は自我である、と云ふ觀念の上に建てられた處の主義の事であります。



### 一、利他主義

利他主義とは、自己と云ふ觀念のある間は、とかく眞の道理の見ゆるものでない。道の根本本體は自我没却である。即ち他を愛するに云ふ所に存在して居るものである。と云ふ處の觀念信仰の上に建てられた處の主義の事であります。

### 二、靈德發展主義

道の根本本體は利己でもなければ利他でもない、自利利他圓滿なものである。自利と利他とは、二にして一、一にして二なものである。即ち自利と利他とは不二一體のものであるといふのが靈德發展主義であります。換言すれば、吾人の本性本體と云ふものは自愛にして即ち愛なものである。と云ふ處の主張であります。

例へば品田俊平の自覺は自愛の極であつて同時にまた他愛の極である。哲理的に云へば自覺は即ち覺他である。他をして覺らしむる性質のものである。實に自愛のみに非ず他愛

のみに非ず宇宙本性、本體實現發展主義であります。本性なるが故に吾人は生じ、本性なるが故に吾人は活動し、本性なるが故に吾人は死するのであります。而も靈德發展と云ふ事は「吾人は眞に自己の本性を自覺して安心して本性の儘に、本性の命令通りに大いに活動してたゆむ事なく、一よりは二、二よりは三、三よりは四と云ふやうな具合に、無限に其の本性を實現せしむべきものである」と云ふ處の安心的努力主義、向上發展進歩主義の事であります。即ち心性靈德大本體、忠實現主義であります。

實に吾人の心性と宇宙の靈德とは不二一體のものである。全く我々は大本體の實現なるが故に、大本體其の儘の働きを爲さなければならぬものである。と云ふ處の思想信念の上に確立せられた處の一大主義是を名けて靈德發展主義と云ふのであります。然るに自己に執着し外界に左右せられ、眞に自身は是れ宇宙本性の御示命なる事を自覺し能はぬ人はたとへ千百の言論を羅列して見た處で、是れ悉く無用の言論のみであつて、實に教育勅語に宣ふ處の、中外に施して悖らざる大眞理、大主義は此の靈德發展主義なる事を深く信じて疑はざる次第であります。



(八月二十八日)

### 第十章 自覺人生觀 (處世觀念の自覺)

今日は心教組織の五項目の中、一番最後の自覺、人生觀、(處世觀念の自覺)と云ふ事について、聊か御話致し度いと思ひます。

先づ第一に自覺とは抑も如何なるものであるか、この問題に向つて解決を與ふる必要がありまます。そうでないといふ人生觀も定まらなければ、處世觀念の自覺も無論解らないのでありまして、眞の自覺と云ふものは、一切の眞理を産み出す處の根本の覺りの事でありまますから、我々が眞に自覺徹底せらるゝと云ふ事になつたならば、一切の眞理が自己の人格上に實現せらるゝに至るのであつて、即ち眞の自覺は即ち覺他である、故に自覺々他覺行圓滿なる所以であつて、是れ即ち人間最高等の人格であり、神でもあり佛でもあるのであります。

人生觀とは、人生の見方の事であります。故に十人は十人、百人は百人皆悉く違ふのが普通であつて、或は青く觀じ、或は赤く觀じ、或は白く或は黒く無量無數であらうと思ひます。しかしながら、眞に此の人生なるものを、眞理の通りに觀じて居る人は或は曉天の星の如きものかも知れぬ。人間の處世上の觀念と云ふものも皆此の人生觀に依つて違ひ信念に依つて異なるものであります。されば眞正の人生觀、眞正の處世上の觀念と云ふものは眞正の自覺、眞實信心、安心立命に依つて發現せらるゝ結果と云ふべきであります。故に人生觀とは人の一生涯に於ける唯一の觀念の事であつて根本的思惟の本源であり、苦樂の源であるのであります。

- 一、智 觀
- 二、澄清觀
- 三、是眞觀
- 四、信 觀
- 五、仁 觀

#### 一、智 觀

人間に此の智が無かつたならば、鳥に羽がないやうなものであり、また猛獸に爪牙が無



いやうなものであります。史記の中に「愚者闇ニ成事、智者觀ニ未形」と云ふ事があります。世の中の正邪を判別する力も、順逆を認識する能力も、皆是れ智力作用であり、國體の本體を知ると云ふ事も、家庭の本體を了解するといふ事も、自己の本性を自覺すると云ふ事も、或はまた甲の病的作用、乙の精神状態等之を洞察する事の出来ること云ふ事も、一として智力作用ならざるはないのであります。政治に教育に宗教に對し、之れが是非を論議せらるること云ふが如きは、是れ明かに智力の作用であります。

未形を觀るの智力がなかつたならば、到底政治も教育も完全に行はるゝものではないのであります。私が病と云ふものゝ根本原理を發見するに至つた事も、深く帝國の將來を慮つて黙するに忍びず、奮然蹶起心教を開立したのも、實に智觀を以て原因と爲すものであります。彼の實語經の中に『山高きが故に尊からず、樹あるを以て尊しとす。人肥はたるが故に尊からず、智あるを以て尊しとす』と云ふ語がありますが、幾ら體格がよくても、幾百年成長しても、愚鈍では薩張價値がない、智と云ふものがあつて、之れを世の中に應用してこそ始めて尊いのであり、價値があるのであります。

聖徳太子は四十幾歳で御かくれになり、吉田松陰の如きは芳紀正に三十歳にして死刑に處せられたのであります。然るに太子の智力、松陰の能力に依つて顯現せられたる眞理は今もなほ赫々として輝いて居るのであります。されば私は眼中に長生と云ふやうな事と思つて居りませぬ。それは無論長生の方法も講じ、長生の利益と云ふ事も認めて居りませぬ。長生と云ふ事よりか眞理と云ふ事に重きを置いて居るのである、萬古不變の生命と云ふ事を本位にして居るのであります。是れに依つて始めて靈徳發展主義が實現せらるゝのであり、智能を啓發し徳器を成就し、進んで公益を弘め世務を開く事が出来るのであり、修身齋家治國平天下の大眞理が實現せらるゝのであります。如何に至誠を以て社會國家を思ふても、唯單に思ふた丈けでは何にもならない、即ち憂慮すると同時に其の國家なり社會なりに、利益を與へなければならぬのであります。

彼の大公望が魚を釣りながらも常に智を磨いて居つたと云ふ事などは、中々に味はひのある話であつて、六韜三略の中に「魚をつるに三徳あり、智徳を以て根本とす」と云ふ意



味の文句があります、是れ實に大公望の大公望たる所以であります。

哲學の根本から云つても儒教の方面から伺つても、實に智を以て最高の目標として居るのであります、智がなかつたならば眞理を發見しこれを開拓する事が出来ないものである、釋尊の教へにしても、基督の教訓にしても、時と處と其の對者とに依つて、種々様々なる形を現じて其の目的を達せられたのでありますから、千年前の教訓方法を其の儘現世に適用しやうとしても、それは眞理を世の中に活現せしむる上に於て、幾多の不便と幾多の不利を感じなければならぬのであります。

例へば我國に於て中古は戦争をするのに必ず鎧兜を用ひたものであつて、鎧兜が無かつたならば戦争が出来なかつたのであります。即ち其の當時には是は立派に戦争に對する自然の眞理であつたので、甚だ有効なものであつたのであります。しかし若し今日の戦争に於て昔有効であつたからと云つて、鎧兜を用ひたならば如何でありますか、それは餘りに愚なことでありませぬ。矢張り今日の戦争には時世に應じて敵に對抗し得る武器を用ひなければなりません。

如何に國家を思ふても社會を憂慮しても、嚴然たる大和魂があつても、鎧兜を着して徳川時代や戰國時代の戦争をしたのでは、忽ちにして敗北して仕舞ふ事は一目瞭然たる話であります、今日の神道、佛教、基督教、等の内には所謂鎧兜を着して戦争して居る時勢後れる布教を爲しつゝあるを見受けるのであります、是等は布教上何等の効果が無いばかりでなく、反つて社會に一種の弊害を生ずる虞があります。されば時勢の推移に従ひ、最大なる眞理を人生界に體現せしむるには、智觀を以て第一義としなければなりません。

## 二、澄清觀

澄清觀を一言にして云へば、念に念を入れて世の中を觀すると云ふ事であつて、孔子の所謂「五十にして天命を知る」と云ふ事でありませぬ。精神をよくよく押鎮め人生を達觀する時には、宇宙は偉大なる靈力を有し、而も一定不變萬世不易なるものが實在して萬象を悉く處理解決して居ると云ふ事が解るのであります。



全く世の中と云ふものはよく出来て居るものであつて、子供が生るれば乳が出て来るしまた其の生れた子供が自然的に運動して五管の發達をはかつて行く、即ち靈德發展主義を行つて行く、大本體の命令通り自然の法則を實行的に發揮して行く、そして無意識的に智能開發を行つて居る譯であります。幻年期の遊戯、青年期の煩悶等、何れも皆悉く眞理に符合して居るのであつて、誠に有り難い事である、尊い事であります。

雨降り風吹き、春夏秋冬絶えず循環し、夏になつて蚊が澤山出て来るやうになる、蚊帳と云ふものがあつて其の蚊害を除いてくれる。また下駄と云ふものや靴と云ふものなごがあつて、表へ出る時には便利を與へて下さる。また三度の食事は三百六十五日變る事なく我々に恩恵を與へて下さる。これ皆な大本體の御蔭であります。殊に我々人間は萬物の靈長として、此の世の中に最も大切な使命を帯びて生れ来て居るものである。嗚呼ありがたいことである。幸福なものであると云ふやうに、どこまでも此の世の中と云ふものを感謝して、有りがたく観じて行く事を稱して澄清觀と云ふのであります。

### 三、是 眞 觀

澄清觀に於て、人間は萬物の靈長であつて、我々等は誠に幸福なものである。また人生の至微不至なる妙味に對し常に感謝の念を以て接すべきものである。と云ふ事を申し上げましたけれども、抑も何ものがこれをつくつたのであるか。この問題に就いては論議しませんでしたが、此の問題に對しては、全く是れ眞也と答ふるより外に道がないのであります。宇宙の大御本體は神佛である。老子の所謂眞宰者あり以て萬物を制するに足るとは即ち是れ眞を云ふのであります。萬象自然の理法で水の上より下へ流るゝは實に是れ眞である。千年の昔も萬年の未來も決して此の理法の變ずると云ふ事はないのであります。『一切萬象悉皆是眞也』と觀じたのが即ち是眞觀、即、心性靈德大本體 忠也と云ふ事でありあります。

### 四、信 觀

信觀とは信念の事、確固不動の確信の事であります。事に觸れ物に當つて動搖するやう



な信念は是は確信ではありません。ほんごうの確信と云ふものは、如何なる物に出會しても決して變動する事のない信念の事であつて、釋迦の如き、基督の如き、近くは乃木將軍等の人々に於て、遺憾なく其れを現はされてゐます。

眞實信心と云ふものは、生老病死等の現象に依つて動搖するものではありません。それは「眞に我を知るものは天地にして、天地を知るものは我なり」と云ふ處の、定住不變の天地の眞理其の儘の心となるが故でありまして、天地の本心其の儘を眞我の本心として居るのでありますから、十字架に登つても聊かも狼狽しない、毒藥を自己の手から自己の口へあほぎつゝも尙且つ平然として居る事が出来るのであります。

即ち、自己を信じ宇宙を信じ、自己と宇宙との關係を達觀して感應道交の眞理を確信し本性の儘に大活動し、大御本體を以て大保護者とし、眠ても醒めても行住坐臥之れを信念して動せず、之を持念して變せず、眼中持念の生を知つて一身の死を知らざる、是を信觀と云ふのであります。

### 五、仁 觀

仁觀とは一口に言へば、自覺の觀念よりして他を覺さしむる處の働きの事でありまして自分ばかり安心しても善いのではない、人をも安心せしめなければならぬと云ふのが實に此の仁觀であります。

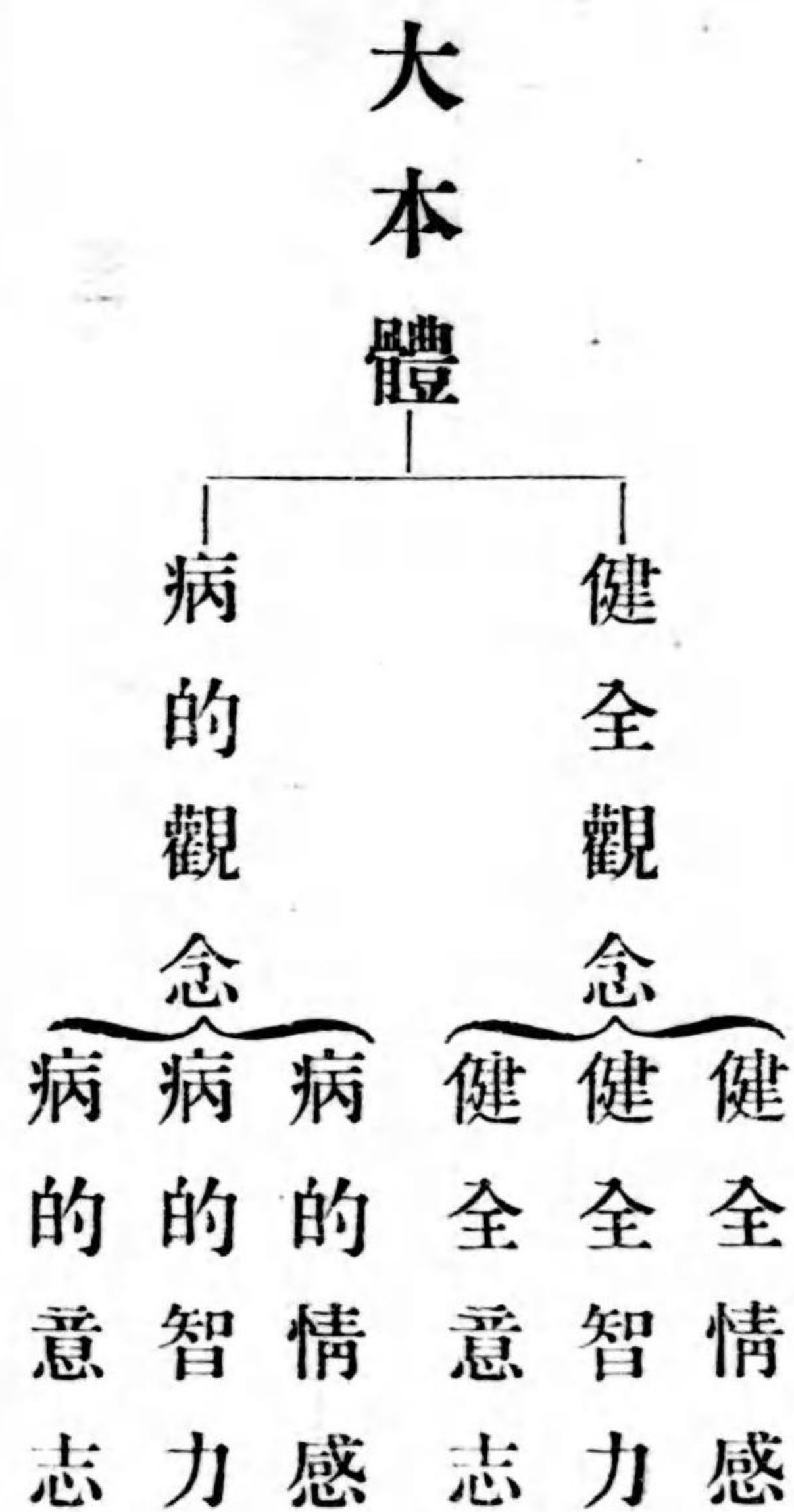
仁とは至情にして身を殺しても生を憐み、萬物を愛育するの義であつて心を以て施すを仁と云ふのであります。金のないものには金の出来るやうに、身體の悪いものには身體がよくなるやうに廣く惻隱の心を起して止まざるものは實に仁であります。即ち人事の限りを盡すと云ふ事が仁である、故に人事即ち天命、天命即ち人事であります、人事の限りを盡すと云ふ事が大御本體其儘の働きである、大御本體の御命令、天命其儘に働くことであります。我々が能く人事を盡す場合には假令病に罹つて居つても、そこに必ず本性本體が實現せられる、即ち天命を自覺する事が出来るのでありまして「嗚呼此の自覺此の信念をどうして獨り黙するに忍びよう」と、この心が私をして直ちに感化救濟の聖業を始めし



めたのであります。心教暗示術の如きも、此の仁觀より生るゝに至つたものであつて、別言すれば慈悲博愛の權化であります。故に粉骨碎身、身命を賭し所謂應病與藥の方法を以て一人たりとも多く煩悶病癘等を除いて上げ、速かに大本體に到達せしめん事を希ふ次第であります。

(八月二十九日)

### 第十一章 二重觀念



### 一、二重觀念

今日は心教暗示術五大要義中の第四項目たる、二重觀念と云ふ事に就て御話申し上げ度いと思ひますが、我々には健全と病的との二重觀念がありまして、此の二重觀念の根本本體と云ふものは、また宇宙の根本本體であるのであります。

私の唱道する心教は、此の宇宙の根本本體及び人間の根本本體を闡明し、以て是を人間の人格上に實現せしむる處の教へでありますから、之を宗教と言はず、哲學と言はずして廣く人道と稱するのであります。實に我々等の人格と云ふものは、此の二重觀念に依つて活動して居るものであつて、宇宙も又實に此の二重觀念の活動であります。故に宇宙の大本體即ち吾人の大本體、吾人の大本體即ち宇宙の大本體と云ふ眞理が了解さるゝ譯であつて、實に宇宙と吾人とは親子との關係であります。即ち宇宙が大我であれば、我々等は小我であつて、我々等の精神中には宇宙の自我が實在して居るのであります。

故に宇宙も吾人も共に等しく心性靈德大本體である、實に心性靈德大本體は大情、大智



大意、三徳圓滿の當體であつて、人類及び一切の萬有を統一調和總括し給ふ處の完全圓滿なる眞理の當體であります。而も我々人間は此の尊嚴なる本性本體の實現であるのであつて、常に清水に明月の宿れるが如くに大本體其の儘の徳性を人格上に實現せしめなければならぬものであり、此の三徳發揮の方法を教ゆる所のものは實に此の心教であります。宇宙の大本體が即ち吾人の大本體でありますから、精神一度心性靈徳大本體ご自覺するに至らば、善、惡、邪、正、悲しみ、苦しみ等皆悉く消滅して、死もなく生もなく老もなく病もなく、實に天地と共に不二體大本體の境界に入つて仕舞ふのであります。而して是等一切の眞理を人間の人格上に實現せしむべき絶對の勢力を稱して健全觀念ご命名し此の反對に是等の一切の眞理をして、吾人の人格上に實現せしめざるべく、常に眞理成就の圓滿相に對し破壊運動を爲すものを稱して病的觀念ご云ふのであります。

### 一、健全情感

健全觀念を情智意の三徳に分類してお話し申しますご健全情感ごは孔夫子の所謂仁であ

り、孟子の所謂惻隱の心であり、釋尊の所謂慈悲であり、基督の所謂愛であります。世の中の人々の苦しみを救うてやり度いと云ふのも、實に此の健全情感の働きでありまして、光明皇后の如き、佐倉宗五郎の如き身命を犠牲に供して社會人類の爲めに盡瘁せられたのは實に此の健全情感の働きであります。

### 三、健全智力

健全智力ごは智慧の事でありまして、即ち過現未の三世に通ずる明徹なる智觀を稱して健全智力ご云ふのであります。如何に艱難辛苦しても、よく天地の眞理を達觀し苦樂の關係を辨別し、悠然として一定不動の確信を持し、一生涯の目的に向つて正心誠意努力奮勵するが如き、又社會人道の爲めに忠身を盡す等の如き、實に健全智力の働きに依るものご云ふべきであります。



### 四、健全意志

健全意志とは、儒教の所謂勇であり、佛教の所謂勇猛精進であります。此の健全意志なるものは、人間の徳性を外界に發現すべき大勢力であるのであつて、如何に健全情感があり、健全智力ありましても、此の健全意志なるものがなかつたならば、到底前の二徳をして人生上に活用實現せしむる事が出来ないであります『知目行足到清凉地』であつて、如何に善良なる目的があり、高遠なる理想あつても、其の目的其の理想をして實現せしめなければ、何等効果のないことであり、而して之を實現せしむるには此の健全意志に依つて、是れ真也と認められた場合には、假令身が粉になつても、飽くまでも實行しなければならぬ。又其の反對に自己の健全情感、健全智力に依つて是れ虚也と認められた場合には、假令一身を亡滅するに至つても、頑として行ふべからざるものでありまして、實に之を行ふも行はざるも、意志の力一つに依つて決せらるゝ問題でありますから、吾人は平素此の健全意志の修養を怠つてはならぬのであります。

### 五、病的情感

人間が病的情感になつて來ますと、する事爲す事悉く自分勝手、非理の慾望主義に活動するに至るのでありまして、國家と云ふ觀念も無くなつて來れば、社會と云ふ觀念も人と云ふ觀念も悉く無くなつて仕舞つて、自分丈に樂しまふと云ふやうになつて來るのであります。國家處ではない一家庭の中に於ても、親と云ふ觀念も子と云ふ觀念も、女房と云ふ觀念も皆悉く失うて仕舞つて、自分一人病的慾望通りに自分勝手な快樂を貪らんとして、汲々たるに至るのであります。

### 六、病的智力

病的智力は目前の事より解らない悪智力の事でありまして、金を溜て何をするに云ふ識見もなくして、唯全く無茶苦茶に金を溜める、社會を益するに國家を利するとか云ふ



やうな、徹底した思慮の少しもないほんの目前の浅い劣悪な智力の事であります。例へば彼の詐欺師の智力の如き、泥棒の分別の如き即ち是であります。是等は少しも統一した智力を持つて居ないので、全く眞理を理解せざるものでありますから、今日よければ明日は首へ繩の懸るのも知らないこと云ふやうな、浅薄な智に依つて行動して居るのであります。是を名けて病的智力と云ふのであります。

### 七、病的意志

病的意志とは、是は善い事である、是は悪い事であること云ふ事が明かに認識されても、善を行ふ事も出来ず、悪を止むる事も出来ないこと云ふやうな、勇断のない意志の事です。知の目があつても行くの足がなければ清涼地に到る事が出来ないのであり、理想實現は不可能なのでありますから、我々は須らく修養勉勵、病的觀念の除却に努力しなければならぬのであります。

## 第十二章 心教の大本体





### 一、心教の大本體

心教の大本體とは如何なるものであるか、と申しますと、靈力爲本と申しまして、靈即ち宇宙の大本體と、力即ち吾人の大本體とは不二一體のものである、天地即ち我にして我即ち天地である、心性靈徳大本體であること云ふことであります。

誠に自然力と吾人の努力とは不二一體のものである、有と無とは二にして一である、精神も物質も、不二一體であること云ふ處の、安心的努力、即ち靈徳發展主義、中道圓滿主義であります。云ひ換へますと、我々は心性靈徳大本體、神佛の働きを爲すべきものであること云ふのが即ち靈力爲本、安心的努力、即ち靈徳發展主義であります。心性靈徳大本體、忠（我れ無くして誠を盡す）なるものは宇宙の大本體であると同時に吾人の大本體なのであります。故に我々が自然の理法、宇宙本體の御命令の儘に安心して、正心誠意努力奮勵すると云ふ事は天地の至善であり、人間最高の道徳でありまして、常住不變の確信、金剛堅固の信念の下に安然として奮勵努力しつゝ、無限に其の靈徳をして發揮せしむること云

ふ事が、實に安心的努力、靈徳發展主義、中道圓滿主義であります。

近來學者間に於て此の努力と云ふ事が、中々八ヶ間敷く論議せらるゝやうになりましたが、何れも皆悉く心教の所謂安心的努力の中に包含されるのであります。甲は「人間には宿命も何もない唯努力あるのみである、故に努力するものは成功し、努力せざるものは成功せず」と云ひ、乙は「努力が必ずしも成功の原因ではない、成功の原因は宿命である宿命力即ち好運力に依つて始めて成功するものである」と論じます。が、心教から申しますと二者何れも未だ眞に徹底せる議論ではないのでありまして、宇宙と吾人とは不二一體である、宿命力即ち宇宙力と吾人の努力とは不二一體なのである、眞に我を知るものは天地にして、天地を知るものはまた我れなのであるから、人事即ち天命であつて天命即ちまた人事なのである、即ち天命即人事とは、正心誠意になつて己れの仕事に對し、安心して力のあらん限り努力すること云ふ事であつて、是れ即ち天地の眞理であると同時に人道の根本であります。

換言すれば、吾人は自然の法則に従つて相生じ相死し、相活動して居るのであつて、宇



宙の大本體と吾人の大本體とは不二一體のものであるとの、根本眞理を發見する時に於て天命即ち自然力なるものも、人事即ち人間の努力なるものも、決して別々のものでなく、不二一體のものである、天命人事共に等しく自然の法則であつて、此法則たるや雷に天地宙の大眞理たるのみならず、併せて人間の眞理である。即ち此眞理の法則を誤らないのが、人間最高の成功であると同時に天地最高の成功である。人各々其形態面容の異なるが如く、各々其の天賦の領分が異つて居るのである。即ち宇宙本性の情智意其の儘を體現して、天賦の仕事をして此の人間世界に實現して居るのである。

されば充分に己れの本性を自覺し其の天分を盡して、本性の月を輝かすべきであつて、處世觀念の自覺も此處まで進んで來ること、物質上の成功本成功は最早問題でなくなつて仕舞ひ、吾人の此の身體の出來たこと云ふ事も、吾人の日々孜孜として奮勵努力すること云ふ事も、共に等しく宇宙の命令であつて而もまた同時に宇宙の行動であるから、人間の存在する以上は、其の身體を支へる丈の物質のつきまごふこと云ふ事は自然の法則であります。たとへば私ならば、心教を普及して居ること云ふ事が、即ち品田俊平存在の法則に依る

譯であつて、宇宙側から云ふ場合には、宇宙の大本體が心教を普及せしむべく此の品田俊平をして、此の人間世界に實現せしめて居るのである。人間側即ち私の方から之を云ふならば、品田俊平は心教普及の爲めに此の人間世界に生れて來て居る譯であります。故に心教の目的に向つて終日終夜全力を傾注して、本性其儘の行動を致すと云ふ事が、自然の法則順應眞理にして、無上の安心、無上の成功であること云ふ結論に到達するのであつて、此の理を稱して、安心的努力、靈德發展主義と云ふのであります。

煩悶即ち快樂、失敗即ち成功にして、而も一より二、二よりも三、三よりも四と云ふやうに其の發展は無際限であり、其の努力にも際限がないのであります。即ち有にして無、無にして有、天命にして人事、人事にして天命であつて、天人不二一體なる處の中道圓滿主義であり、實に總括的、調和的、宇宙的の一大主義であるのであります。哲學にも片寄らず、宗教にも偏せず、儒教にも耶蘇教にも佛敎にも執着せずして、是等總ての世界に實現せられたる眞理全體を納めて以て一丸とし、以て天地本性の發揮に努力する處の人道敎であります。



即ち宇宙の根本本體を主として、印度の佛教も、支那の儒教も、ユダヤの基督教も、何れも皆悉く淳化する處の教へであり、哲學でも化學でも、物理でも醫學でも、悉く真理の存する處をば普く漏らさないと云ふ處の、公明正大な圓滿主義であります。故に心教は宗教と言はず、宗派と言はず、學派と言はずして、宗教、倫理、哲學の根本本體を闡明にし、以て社會國家の發展に資せんと欲する一の人道教であつて、是れ實に心教そのものの大本體であると同時に真理の根本本體であります。

### 一、靈力爲本

昨日から御話して參りました如く、心教そのもの大本體は靈力爲本と云ふ事であつて靈力爲本と云ふ事は即ち安心的努力であり、靈德發展主義であり、忠元論であります。言はゞ是等は皆悉く異名同體でありますけれども、心教の大本體として申し上げる場合と靈力爲本として申し上げる場合と、靈德發展主義として申し上げる場合と、安心的努力主義或はまた忠元論として申し上げる場合等、其の根本真理は同一であつても、表裏主客の

關係上多少其の色彩を異にし、何れも皆悉く必要にせまつて出來上つたのでありますから、今日は靈力爲本と云ふ題目の下に御話致し度いと思ひます。

(八月三十日)

### 三、自然と努力と不二一體

靈力爲本とは「吾人は自己心靈の力を以て處世の本と爲す」といふことで、世事一切の截斷は靈の許すに任じ、假令眼前に利ありと雖も理にあらざれば取らず、假令眼前に不利なりとも理の存する所は敢行するといふ、所謂唯理唯善主義であります。故に言行の一切は總て自然と同化を期することとなるのであります。多くの人は努力を以て苦痛なり艱難なりとしますが、靈力爲本から申せば自然の萬象は不休の努力無限の勉強を繼續して、風雪寒熱に克く抵抗し不屈不撓其の本性に殉じつゝあるのでありますから、吾人の努力は即ち自然と不二一體の實現で、此の努力は吾人の本能であり本務なのであります。然るに努力を以て苦痛と爲すが如きは人生の本務を知らざるのみならず、苦痛と快樂を



顛倒して居るもので、一時の儉安を以て快樂なり遊惰を以て安逸なりとし、職務に力を致し勞苦に汗を絞るを苦痛なりとするのでありますが、靈力爲本を以て苦痛と快樂の定義を下せば、強健の身體を以て其の職分に努力し得るは快樂の最も優れたるものにして、時間を浪費して手を懐にし、或は遊惰放逸に得難き人生を空送するは苦痛の甚だ敷ものとするのであります。然るに若し一人にして安樂を欲せざるものなく苦痛を厭はざるものなし靈力爲本は社會を益せんが爲めに、國家を利せんが爲めに此の説をなすものならんも、自己一人の利害を顧みざるにせよ、人生の欲求に従ふは決して道に反くものにあらず」と、云ふ難者ありとしますれば實に度し難き言といはねばなりません。世に眞理を尊び自然を恐れ、非理を排し不自然を斥くるは、眞理が單に是なるが爲めのみでなく、非理が非なるが故のみでなくして、是は吾人を利し社會を益し、非は之れと反對の結果となるからであります。

斯に努力が是なるか遊惰が非なるか、其の結果に就て究むれば一目瞭然たることであります。努力の結果としては(一)身體を強健ならしむること(二)心安らかに(三)一家

に不言の良教訓を與へ社會の信用尊敬を受け(四)自然の活動状態と一致す。遊惰の結果としては(一)身體を損ふ(二)心安からず(三)一家に悪感化を與へ社會の排斥を受け(四)自然の活動状態に反す、此の如き相違を生ずるのでありますから、自然と努力とは不二一體で天人の合一は實に斯にあるのであります。

世に尊重すべきもの、數は多いけれども、正當なる努力程神聖なるものはなく、心性靈徳大本體といふも其の實は正當なる努力の依つて來るべき本體で、宇宙より努力其のものを抜き取れば宇宙は死物たると同時に、吾人は一分時も生存することは出來ないのでありますから、吾人の努力は即ち宇宙の努力と合する所以であつて、自然即ち努力、努力即ち自然であります。

昨日御出での方は御存じでもありませんが、長野縣から甚だしい精神病者が來て居りますが、昨夜の如きは一時より三時までの間、荒れ馬のやうにあれば出したのであります。此の蚊の居るのにチツトも蚊帳の中に入らない、仕方がないから私はつききりについて居り、家族の者もこれが爲め昨夜は條々眠らなかつたのであります。しかしながら是に對し



不快感を以て接して居るものは勉強修養の爲め他より來られて居る學生さん達を始めとして唯の一人もありません、是れ即ち靈力爲本であります。その病人を私が世話をしてやらなければならぬと云ふ事も、決して偶然の出來事ではなく、全く大御本體の御命令に依る事でありますから、その病人に對する私の一舉一動は天命である、人事の限りを盡さざるべからざるものなのであります。

私共が朝夕斯如にして働く事が出来ること云ふ事は、何より有り難い事であつて、私は嘗て十八日間殆んど徹夜で病人の看護をした事がありますが、其の時に私は是は天地の御指命である、品田は必ず是等の仕事を爲さなければならぬ約束があるのである、嗚呼ありがたい事であると感謝に堪へなかつたのであります。自覺せぬ以前の私であつたならば、十八日は愚か一時間でも睡眠が足りないと言ふと、直ちに不快感を起したものであります。然るに現今私の信念は、私をして十八日眠らなくても感謝せしむるのであります。あゝなんと有り難いこと、幸福なことでありませう。是れ即ち靈力爲本であります。

#### 四、持念的安心

自悟的安心

持念的安心

賴他的安心

自他不二一體

持念的安心とは、自分の力と宇宙の力と云ふものは不二一體のものであること云ふ、確信の下に安心決定せるを云ふのであります。哲學や宗教などに於ても、自力他力と云ふ事は中々重大問題となつて居るのであります。また我々は實際上に於て自力即ち自分の力と云ふものと、他力即ち宇宙力と云ふものをば、人生の大問題として解釋をせねばなりません。此の自力論他力論を詳述して自他不二一體論、即ち持念的安心と云ふ事を申し上げます。此の云ふ事は、到底一日や二日の日數を以て御話し出來ぬ事でありますから、其の大事を申し上げますれば、自力論者即ち自悟的安心論者は、どこまでも自分の力と云ふものを信じて、一切の問題を悉く自己の力に依つて解釋せんとつとむるものであります。また他力即



ち頼他的安心論者は、自分の力と云ふものは全然たのむに足らないものであつて、たゞたのむべきは天地の御力である、故に天地宇宙の御力を信するを以て絶対的安心なりと主張するものであります。

然るに心教の持念的安心とは、自分の力と云ふものと、宇宙の力と云ふものとは不二一體のものである、決して自分の力、宇宙の力と云ふやうな具合に、自己と宇宙と云ふものは分離されて居るものではない。と云ふ處の見地より人事を盡すは即ち天命。天命は即ち人事を盡すにあり。と云ふ處の常住不變の安心であつて、之を名づけて持念的安心と云ふのであります。

### 五、積極的努力法（心教暗示術）

心教に於ける暗示術とは實に其の意味の廣いものであつて、前章に於て屢々論述して參りました如く、廣義の心教暗示術も狭義の心教暗示術も共に等しく人間の積極的努力法であります。水の上より下へ流るゝ、松の青々として千載に其の操を替へざる、皆是れ悉く

く宇宙の吾人に對する積極的暗示法であります。故に自然法自覺の消極的安心は即ち積極的努力であり、天命自覺は即ち人事を盡すと云ふ事になるのであつて、實に安心と努力とは不二一體のものであります。そして此の積極的行動を稱して心教では暗示術と命名するのであります。此の故に天地宇宙は大暗示者であること云ふ眞理が明かに發見せらるゝと同時に、森羅万象悉く暗示なりと云ふ處の天地の本性をも發見する事を得るに至るのであります。（心教では萬有の活動状態を悉く廣義の心教暗示術と見て居るのであります）

### 六、和光同塵（心教普及法）

何れの教義に於きましても必ず普及法と云ふものが必要なものでありまして、佛敎の法衣の如き、基督教の十字架の如き、是れ皆な普及法であります。心教も亦一つの教義がある以上、如何なる普及法を用ゆべきかと云ふ問題が起るわけで、私は『和光同塵』を以て心教普及法としたのであります。即ち自分の智力、自分の才能をなるべく現出しないで、塵の中に交つて世の中を感化救濟して行くこと云ふ處の方法でありまして、無量無邊の形を現



二一四  
じて世の中を感化救済すると云ふ主義、是れが即ち和光同塵であります。

(八月三十一日)

### 第三編 忠元論

- 一、心物不二一體…………… 唯心(精神)。 唯物(物質)。
- 二、平差不二一體…………… 平等門。 差別門。
- 三、自他不二一體…………… 自力門。 他力門。
- 四、人法不二一體…………… 人成因法。 法起待人。
- 五、自必不二一體…………… 意志自由論。 意志必然論。
- 六、復歸本體…………… 此土淨土。 他土淨土。
- 七、靈魂滅不一體…………… 靈魂滅說。 靈魂不滅說。

今日は心教の主要なる理論即ち忠元論に就いて、其の大要を御話致し度いと思ひます。



昔から今日に至るまで随分學者間に疑問となつて居る處の大問題が多々存在して居ますが、心教は是等の大問題に向つて如何なる解決を下して居るか、と云ふ事を御話する事は決して無益の言論でないと思ふ確信いたします。實際是等の議論を詳しく申すと云ふ事になりますと、中々一時間や二時間の時間で以ては、到底云ひ盡す事の出来るものではないのであります。哲學上の大議論としては、無元論、虚無論、唯心論、唯物論、物心兩立論、物心一體論等種々ありますけれども、哲學者としての泰斗「スペンサー」「ヘーゲル」等の諸氏は物心一體論を主張し「ベーコン」氏は唯物論を唱へ「デカルトン」「フィッテ」氏等は唯心論を唱導し、また彼のヒューム氏の如きは無元論、虚無論を主張してゐるのであります。

如斯く、古來幾多の哲人賢人が種々様々なる處の學説を吐いて居ますけれども、歸する處は物質と精神との二ヶの現象に對する解釋に外ならぬのであります。即ち天地宇宙の解剖に外ならぬのであります。換言すれば唯心論も唯物論も物心兩立論も物心一體論も無元論も虚無論も、皆悉く精神と物質との本體論に過ぎぬのであります。故に常に哲學上の議論のみに止まらず、一切の學問の本源また實に此の精神と物質との二大現象なりとせざるを得ないのであります。

### 一、心物不二一體論

唯心論の主張する處は、物質と云ふものを全然假りに見て「宇宙の根本々體は唯一の心である、此の唯一の心なるものが常住不變の實在であつて、一切萬象を形成するものである。たとへば我々人間を見ても、生命ありと云ふ事も、運動すると云ふ事も、暑い寒いを感ずると云ふ事も、美醜を見分けると云ふ事も皆悉く是れ心の作用であつて、若しも此の心と云ふものがなかつたならば、何ものをも認むる事が出来ない、故に精神以外に常住不變の實在する事無し」と物質と云ふものを全く假りに見て仕舞ふ處の議論、是れ即ち唯心論であります。

唯物論の主張する處は「天地宇宙の根本實在は物質である。種々無量無數の物質が相集合して、始めて此の天地宇宙と云ふものが出來上つて居るのである。物質以外には何もの



もない。たとへば我々の身體に就て考察して見ても直ちに解る事である。腦髓にしても物質が不完全であれば必ず十分の働きを爲す事が出来ないものである。彼の馬鹿の如き白痴の如き皆是れ物質の不完全に原因するものである。されば物質要素の不完は精神作用を運用する不完の本源にして、全く精神と云ふものは物質結合の働きに依るものである』と云ふのであつて、故に物質以外に精神と云ふものを全く假りに見て仕舞ふ處の議論、是れ即ち唯物論であります。

心教の心物不二體論 忠元論とは如何なる立論であるかと云ふに「心を離れて物なく物を離れて心はない。』といふ中道説であります。即ち精神と物質とは不二體なりとの説であつて、物心不二體即ち忠であるとの立論即ち是れであります。心教に唱導する『忠』とは宇宙真理の總稱 即ち萬有大本體の實名の事であります。故に森羅萬象は忠を以て根本實在となすものであつて、實に『一切萬象悉皆忠』より發現して又忠に歸する不二體を忠元論と稱するのであります。

人間の人格を考察するに精神のみ存するも肉體がなくては以て人と稱することは出来ぬまた肉體のみ存するも精神なくばまた人と稱することは出来ぬのであつて、即ち人間とは精神と肉體との和合状態の總稱であります。故に彼の死人の如きは既に人間たるの資格を失つたものと云つても決して差支ない、しかしながら假令死人にしても一種の精神を持つて居ると云ふ事は認めなければならぬのであります。

彼の古哲「アリストートル」が「動物には動物的精神があり、植物には植物的精神、人類には人類的精神がある」と觀察して居りますが、是は誠に眞理であつて、死人と雖も矢張り死人的精神を持つて居る、即ち宇宙の萬物一として此の自然の法則に支配せられざるものはないのであります。そして此の自然法の根元は即ち心物不二體 心性靈徳大本體 忠である、水の上より下へ流るゝ、松の春夏秋冬青々として、千載の後尙其の緑を替へざる、人間の自覺修養等皆是れ物心不二體 心性靈徳大本體 忠に根元するものであつて是れ即ち忠元論であります。



### 二、平差不一一體論

平差不一一體とは、平等で有つて差別、差別であつて平等である、其の當體が即ち心性靈徳大本體、平差不一一體。忠身である。云ふのであります。差別相の方から云へば天地、男と女、老と若、短と長、表と裏、主観と客観、假観と空観、幽と顯、精神と肉體、有と無、剛と柔、奮闘努力と安心立命、戦争と平和、常義と大義、始と終、本と末、經と緯、大極と無窮、正と邪、直と曲、美と醜、善と惡、眞と偽、晝と夜、健全と病的、清と濁、統一と分裂、樂と苦、成と敗、禍と福、生と死、忠と不忠、孝と不孝、神と惡魔、凸と凹、佛と鬼、内と外、精と粗、大と小、厚と薄、深と淺、強と弱、普遍と偏頗、火と水、愛と憎、一神と汎神、富と貧、譽と毀、褒と貶、進と退、順と逆、榮と枯、盛と衰、貴と賤、壽と夭、通と塞、神意説と人意説、自然説と抵抗説、同情説と反對説、快樂説と苦悶説、一元説と多元説、思議説と不可思議説、社會主義と愛國主義、自愛主義と他愛主義等の無量無數に差別することが出来るのであつて、之れを差別論と云ひます。

之れに反して平等論者は無差別的に生もない、死もない、苦も榮も無い、本來は空である、無である、幽である、平等であると斷定するのであります。心教の忠元論は、差別論に偏せず、平等論にも黨せず、平差不一一體なりとの眞理が了解さるゝ教へであります。如斯心教の教義は甚廣、甚深、幽玄微妙、崇高森嚴にして、宗教、哲學、儒教、倫理、諸學等の蘊奧極致を極め、顯に出で幽に入り、生死を通じ、三世を連續し、宇宙萬象の表裏を調和し、統一し、總括したる、圓融無礙なる中道圓滿の眞理（圓滿主義）であります。

### 三、自他不一一體論

自他不一一體とは、自力のみでなければ、他力のみでもない。自力即ち他力、他力即ち自力であり、自己即ち宇宙にして、宇宙即ち自己である。即ち自力他力一體のものである。個性宇宙、不一一體のものである。即ち我を離れて宇宙なく宇宙を離れて我はない。天地自然の法則。宇宙本性なるが故に吾人は生じたものである。してみれば吾人の自力は即ち



宇宙側から云ふ時は他力である。吾人の他力はまた宇宙それ自身の自力となる譯であつて全く其の本性は忠身である。即ち自他不二一體であるといふ論であります。

#### 四、人法不二一體論

人法一體とは、人成因法のみにも非ず、法起待人のみにも非ず、人と法とは一にして二にして一であるとの説が是れであります。人成因法論は「人と云ふものは決して力のあつたものでは無い。力と云ふものは法にあるのである。國家に法がなければ國家を治むることが出来ない。又彼の弘法大師の秘密法の如き、基督の奇蹟法の如き、皆是れ法の力である」と云ふのであり、其の反對に法起待人論は「法と云ふものは決して偉いものではない人が偉いのである。人が法を運用するので、即ち法は人に隨ふものである。彼の不動の如きは弘迦牟尼佛と云ふ人が偉かつたから即ち法を善く運用したから出來たのである」と云ふやうに論するのでありますが、これは何れも偏狹論と云ふべきもので、法即ち人で、人即ち法である。偉い人と偉い法とが相一致して、始めて眞理に到達するのであります。

#### 五、自必不二一體論

自必不二一體とは、意志と云ふものは自由にして自由にあらず必然なるものであつて又必然なるものでない。自必不二一體のものであるとの議論が是であります。意志自由論者は「人と云ふものは意志次第に依つて如何なる事でも出來るものである。百二十五歳まで生きやうと思へば生きられぬことはない」と云ふやうに論じ、又、意志必然論者は「意志と云ふものは必然のもので、斯うしようと思つても其の通りにならないのが人生の常である、意志は全く必然的のもので己がはからひの及ぶべきものではない」と云ふやうに論ずるのでありますが、是れは何れも偏狹論でありまして、意志自由と意志必然とは一にして二、二にして一のものであると自覺したのが自必不二一體——心性靈徳大本體——忠であります。



### 六、復歸本體論

復歸本體とは、此土淨土のみでもなければ他土淨土のみでもない、此の人間世界のみが淨土だと云ふのでもなければ、また來世に於てのみ極樂淨土若しくは天國等があること云ふ説でもなく、大御本體に相一致したのが淨土即ち樂土であること云ふ説でありまして、心教では此の世彼の世と云ふやうに區別して淨土なるものを觀じて居るのではありません。心性靈徳大本體が即ち淨土であつて、人間と生れたからには人間の働きをするに云ふ事が即復歸本體であります。故に生も死も皆悉く樂土ならざるはないのであります。

然るに天地の本性に相反して居る處のもの、即ち人道を無視した行ひのものは皆悉く苦界であつて、一枚の紙一杯の水と雖も、宇宙自然の法則に隨ふて忠身なれば是れ即ち復歸本體であります。そして彼の肉體の死と稱する事が即ち、皆様の心性靈徳大本體が宇宙の心性靈徳大本體に復歸した譯になるのであります。

### 七、靈魂滅不一體論

靈魂と云ふものはあるものであるか、無いものであるか、若しまたあるものとしたりならば、滅するものであるか滅せないものであるか。この大疑問に對し心教は『靈魂は滅不一體なり』と答ふるのであります。心教では宇宙の大精神たる大本體『吾人の大本體即ち心性靈徳大本體』忠を以て靈魂と稱するのでありますから、眞理の不生不滅なると同時に、吾人の靈魂も眞理なるが故に不生不滅なのであります。たとへて申しましたならば、眞の品田俊平の生命は眞理なるが故に不生不滅であり、萬古不變常住無限であります。即ち品田俊平が假令死んで形が見えなくなつても、これは品田俊平の假相の變化に過ぎぬのであつて、決して其の實体に於ては變化のあるべきものではありません。故に嚴肅に立論すれば、靈魂滅不一體『眞理不生不滅であります。



### 八、本命説

心教に於て、本命と云ふ事は甚だ大切なものでありますから、今日は此の本命と云ふ事について聊か御話して置き度いと思ひます。

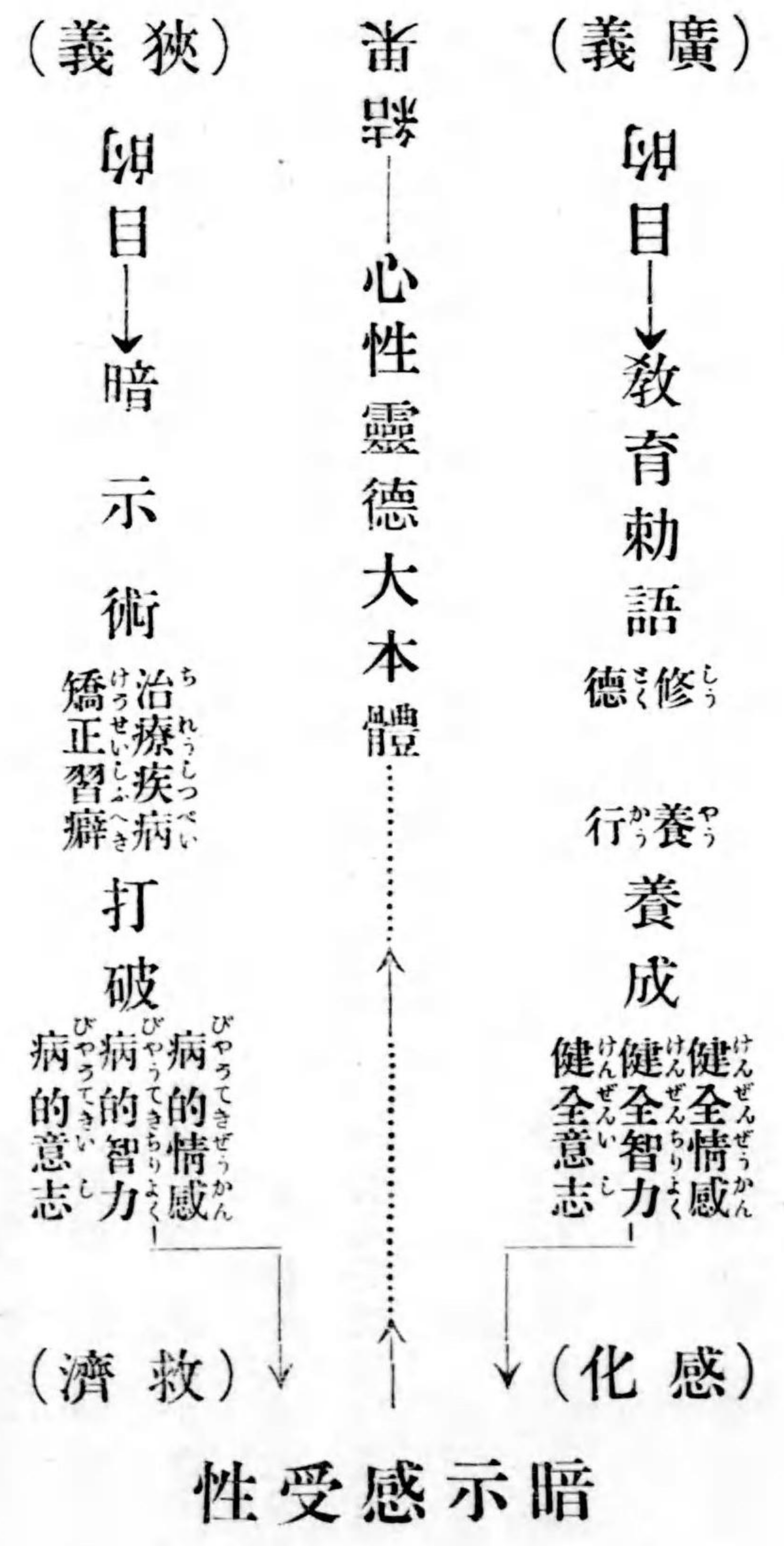
本命とは、天地本性其儘の自覺の事である、自他不二一體、中道圓滿なる自覺信念。體相用三大の完全なる實現の事でありまして、水の上より下へ流るゝ、松の青々として千載に其の操を替へざる、是れ即ち天地本性其の儘の働き。大本體の御指命其の儘の作用であつて、即ち本命であります。されば品田俊平の生れたと云ふ事も、品田俊平に依つて心教の開立されたと云ふ事も、今回の此の講習が首尾能く終結を見るに至つたと云ふ事も、是れ皆悉く大本體の御指命即ち本命によるのであります。故に此の本命と云ふ事は、我々の大いに喜ばなければならぬ事であつて、幸福と云ふ事も安心と云ふ事も、暗示と云ふ事も明示と云ふ事も、向上發展進歩、靈徳發展、心性靈徳大本體、眞理等一として御本命の働きたらざるは無いのであります。

又、心教に就いて考へて見ても、先づ其の目的でも教義でも人生觀でも、皆悉く大本體の御命令に依つて、觀念となり自覺となつて現はれて來たのであつて、是れ即ち本命であります。心教が一切の宗教一切の學説の不統一を統一し、政治教育等の四分五裂せる病的状態をして健全状態に復歸せしめ、而して一視同仁中道圓滿の大眞理をして、此の人生界に實現せしめんと極力努力しつゝあると云ふ事も、天地本性其の儘の活動である、大本體の御指命其の儘の働きである、即ち本命であります。故に一言以て之を謂へば萬有は萬有相互に其の働きを實現し、靈徳發展を實行して居る事が即ち本命なのであります。



# 第四編 總結論

## 心教暗示術



終りに臨んで今回の講習全體を總括的に御話申し上げます、今回の講習全體の要旨は心性靈德大本體 忠なる中に全部包含されて居るのであります、講習中千言萬語を喋々

しましたけれども、歸する處は心性靈德大本體 忠なる眞理を了解せしめんが爲めの方法手段を講じたるに過ぎぬのであります。故に諸君が心性靈德大本體 忠なる眞理が能く御解りになつたならば、宇宙とは何ぞや、人生とは何ぞや、人間とは何ぞや、自己とは何ぞや、生老病死とは何ぞや等の諸疑問は皆悉く釋然として容易に解決せらるる筈であります。そこで此の圖解に示す心教暗示術の、心とは實體たる心性靈德大本體の事、教とは實相たる教育勅語の事、暗示術とは實用たる心教暗示の事であつて、即ち心教そのものゝ體相用の三大要を示したものであります。

人道の模範たる教育勅語も、人間が心性靈德大本體に到達したならば、直ちに其の人間の行動に依つて是が實生活上に實現せらるるのであつて、健全觀念と云ふ事も、健全意志と稱する事も、皆是れ悉く心性靈德大本體 忠の實現に附したる名稱であつて、實に忠は宇宙萬有絶對の眞理であります。吾々人間の人格が忠に相一致した時、其の行ひが教育勅語其の儘になるのは當然のことであつて、是れ實に人道の模範聖賢教義の極意であります。



感化と言ひ、救済と言ひ、修養と言ひ、德行と云ふも、皆悉く忠の發現靈徳發展の狀態に外ならぬのでありますから、教義を説いて健全觀念を養成し、修養感化に努力すると云ふ事も、狹義の心教暗示術を應用して、疾病施術、惡癖矯正、即ち病的觀念を打破して救済を行ふと云ふ事も、歸する處は心性靈徳大本體——忠の實現應用であります。

然るに人間と云ふものは兎角病的觀念が旺盛であつて、中々以て心性靈徳大本體——忠たり難い、恰も曇天の日光の如きもので、幾ら光明を放たうと思つても容易に雲霧が退散しない、そこで此の心教暗示術と云ふものが必要なのであります。心教暗示術は、即ち雲霧とか、惡魔とかを追ひ拂ふ處の戰士である、即ち大本體たる忠、實相たる教育勅語を生かして行く處の活用方法なのであります。されば吾人は廣義の心教暗示術に依つて感化せられ、狹義の心教暗示術に依つて救済せられ、彼此相應じて誓つて大本體に到達するやうに心懸けねばならぬのであります。

嗚呼何んぞ云ふ有難いことでありませう。不肖品田俊平は欣喜雀躍手の舞ひ足の踏む處を知らざる感がいたします。假令十日でも十五日でも、自己の計畫豫定が満足に遂行せらるゝと云ふ事は、餘程の良縁が無ければ出來得べからざることである、然るに今日は目出度くも、首尾能く大御本體の御指名に依つて目的が達せられたのであります。即ち十有餘年間研究に研究を重ね、實驗に實驗を遂げて、慥に個人及び社會國家の病を治する大道であると思ひて疑はざる處の、眞理の主要を兎も角も豫定通りに話したのであります。諸君も亦御熱心に一日も缺かさず御來聽下さいまして、寔に私は歡喜に絶ない次第であります。されば心教の教義に従ひ『報徳文』を拜讀し、以て終了の辭に替へ度いと思ふのであります。

## 人生の解決終



## 閉會の辭

森

瓦

二二二

愈々本日を以て、今回の講習會も首尾能く結了致しまして誠に大慶に存じます。

偕て講習中品田扇下の最も熱誠を込められた御懇篤なる講演に對しましては、眞に感謝の言葉がありません。諸君に於かせられましても、亦最も熱心に聴講せられたるは誠に感服に絶わざる次第でありまして、扇下の御満足は申すに及ばず、大御本體の御喜びはまた如何ばかりであります。

是迄も講習會は數回開かれましたけれども、未だ曾て今回程通俗的で分り易い御講演は承はりませんでした。寔に諸君は幸福な方々であつて、定めて講習前と講習を受けた今日とは、その人格の上に特に著しい相違のある事を、首肯せらるゝ事であらうと私は深く信ずるのであります。

そこで唯今扇下の御辭にもありましたが、之から益々研究に研究を重ねられて、心教の主義綱領に必ず副ふやうに、最も熱心に靈徳發展に努められん事を切に希望いたします。

尙また青年諸君に對して特に申し上げ度いのは、諸君の前途はなほ途遠であつて其の責任も亦極めて重いのである、何となれば將來の國家の相續者は諸君であるからであります。

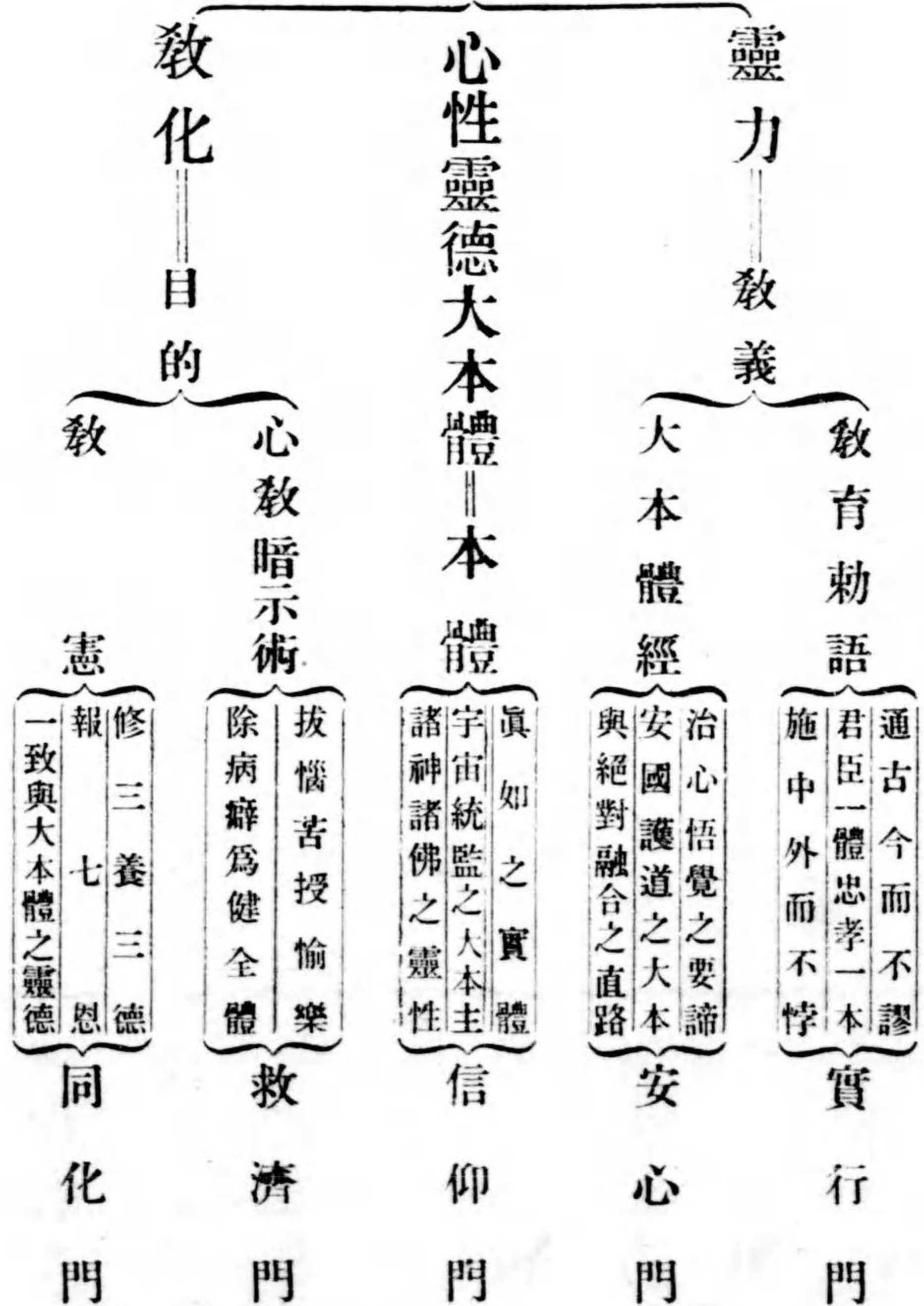
然るに吾國現下の状態はごうであるかと言へば、御覽の通り實に重患である、諸君、諸君は幸ひにして今茲に完全無缺なる心教の講習を受けられたのであるから、須らく此の心教を提げて、此の國家及び個人の大病を醫さなければならぬのである。故に諸君は是より層一層研究に研究を積み、社會國家の爲めに忠身を以て、彌々益々奮勵努力せられん事を深く懇望して止まざる次第であります。

終りに臨み、諸君の御健在と御幸福をお祈り申します。



心 教 組 織

心 教





惡癩  
矯正

# 心教療院

疾病  
治療

開院 明治三十八年三月廿一日

院長 品田俊平先生

副院長 品田聖平先生

場所 東京青山穩田七九

治療時間 院内 午前八時より 午後一時より  
外院 同 十二時まで

遠隔治療 遠方の御病人は「遠隔治療」のお求めに應じます。申込次第説明書進呈。

難病者が  
澤山お治  
りになり  
ます。  
ごんな病  
氣のた方  
でもた出  
で下さい

## 是非お読み下さい

◇開院以來今日まで二十年間、院長の御治療によつて、感化救濟され  
ました難病者、惡癩者は、その數實に數萬人に及び、

◇前皇子傅育官長三好愛吉先生は「その手一たび病者に觸るれば病忽  
ちにして治癒し……」と驚歎せられ。

◇我が心理學界の泰斗、福來友吉博士は「余の最も多く敬意を表する  
暗示術士である」と激賞して居られますが、大正七年より

◇畏くも 宮殿下を初め貴顯の御治療を申しあげられますことによつ  
ても、院長が世に稀れな心理療法大家であられますことを、御了解  
になられることと存じます。

◇なほ治療に關する詳細は、直接に療院でお尋ね下さい。



# 心 教 は

- 一、宗門學派の別なく普遍の教化を成し、忠（無我盡誠）を竭さしむる大日本の國教であります。
- 一、國體の尊嚴を闡明して民心の歸嚮する所を示し、思想界を統一する教へであります。
- 一、學問なき人にも道を知らしめ教育勅語を靈德的に踐行せしむる教へであります。
- 一、靈徳心を開發して、健全なる欲望を發揮せしめ、敬虔なる人格を養ふ教へであります。
- 一、煩悶疾癘等一切の苦惱を滅除して、人生の妙樂を得せしむる教へであります。

大正五年二月二十七日印刷  
大正五年三月一日發行  
大正八年三月十五日四版

大正九年七月一日五版  
大正十四年十二月二十日六版（縮刷）  
五日

不許複製

## 人生の解決

定價金壹圓五拾錢  
（送料金六錢）

著者	東京府豊多摩郡千駄谷町穩田七九
品名	品田俊平
發行者	東京府豊多摩郡千駄谷町穩田七九
品名	品田聖平
印刷者	新潟縣刈羽郡柏崎町本町六丁目一六九七番地
品名	小田金平
印刷所	新潟縣刈羽郡柏崎町本町六丁目一六九七番地
品名	小田活版所

發行所

心 教

學院

東京青山穩田七九

振替口座東京三三三〇二番  
電話青山七四壹壹番



297  
62



終

